

## 豊臣秀吉と「都づくり」

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

戦国の乱世を終息させ天下統一を果たした豊臣秀吉は、権力拠点となる「首都」そして京都をどのように考え、造りかえたのでしょうか。

秀吉の「首都」構想は、次のように要約できます。①信長の後継者としての「首都」大坂、②武家閥白の「首都」としての京都、③天下人太閤の「首都」としての伏見、④秀頼のための「首都」大坂。それぞれ興味深いところですが、以下では京都にフォーカスしましょう。

武家閥白となった天正13年(1585)以降、強大な権力を背景に京都市大改造に着手しました。延暦13年(794)の平安京建都からおおよそ800年後のことです。その一連の都市改造事業は、「都づくり」といえるほど大規模なものでした。

大きくまとめると、①天下支配の拠点として新たな城郭(聚楽第=秀吉の城郭と御殿、後隔成天皇の行幸御殿)と城下(大名屋敷)をつくり、②インフラの整備(三条橋・五条橋の架設、長方形街区の設定)と③身分用途地域制の施行(市中雑居の解消、武家町と公家町、寺町と寺の内の建設)によって近世都市に改造し、④惣構(御土居)の築造によって洛中洛外の境界を確定し、⑤記念建造物の完成と式典(東山大仏殿の竣工と



桃山時代の京都(「安土・桃山時代」『平安京百景 京都市平安京創生館展示図録』を調整)

千僧供養会)をもって仕上げとしました。

以上のほか、中世的な諸関係の払拭・清算を意図した施策として、洛中洛外の検地、そして「替地」(領主の洛中散在所領と洛外の土地との交換)、京中の地子銭永代免除

なども重要といえるでしょう。

こうした破壊的創造の一方、秀吉は、内裏と五山など主要な寺院、市街(とくに下京)、道路と街区をそのまま残しました。「都づくり」に大事なものとして保持・継承したことに注目しておきたいと思



写真1 東山大仏殿（方広寺）築地帯の調査（2021年）



写真2 京都新城石垣・堀の調査（2021年）

ます。

これらの総合的な結果として、天下人秀吉による一元的な支配が貫徹する近世城下町・京都が出現したのです。わずか10数年で京都を復興させたその「都づくり」は、トップダウンの都市計画でした。しかし、京都の住民が歳月をかけて創り上げた草の根「まちづくり」の成果を受け継いでいるともいえるでしょう。

ここで平安京と城下町京都をかんたんに比較しておきましょう。秀吉は長大な惣構を構築して落中を大きく取り囲み、首都の範囲を確定しました。都市壁のなかに多くの農耕地を含んでいることは顕著な特色で、ユーラシアにおいても例外的です。また平安京の「羅城」は都市壁とはいえないものでしたので、秀吉の京都が最初の本格的な（囲郭都市 *walled city*）といつてよいでしょう。

平安京の大路小路は条坊制にもとづいて整然とつくられました。早くから宅地・耕地化するなど中世的な姿に変化していました。し

かし、秀吉はこうした道路を旧に復することはしませんでした。戦国期の状態をそのまま引き継いだのです。

ただ、秀吉が町衆の智慧に学んで新たに付け加えたものがありました。南北に走る「突抜（つきぬけ）」です。今後の市街地開発を想定して、とくに下京周辺の広い範囲に計画的に通したのです。「突抜」は、戦国期にはすでに存在していましたし、秀吉の後につくられた突抜も少なくなかったでしょう。

秀吉の「都づくり」の姿は、今ではほとんどみることができません。聚楽第をはじめ大仏殿、御土居なども、ほぼすべてが失われました。とはいえ、ときおり地中から姿を現わす「都づくり」の遺跡は、驚きに満ちています。ごく最近の事例でも、大仏殿や「京都新城」（慶長2年〈1597〉）、伏見指月城の発掘現場からは、かつての壮麗さや威容が強く伝わってきます。

京都には聚楽第などの遺構と伝わる建築がいくつかあります。しかしどれも確証はないようです。

ただ、私はひそかに妙法院庫裏が秀吉建立の唯一の遺跡だと考えています。この国宝の桃山建築は、「秀吉が方広寺大仏殿の千僧供養を行ったときの遺構と伝えているが、建立年代は明らかでない」とされています。しかし私は、史料の検討から由緒も建立年代も明らかと信じているのです。

文禄4年（1595）9月、秀吉は東山大仏千僧供養会を挙りました。その会場として創建されたのが巨大な「妙法院経堂」です。経堂は「大仏殿東方」にあったので、大仏殿の発掘調査から立地もほぼ推定できます。妙法院庫裏は、その経堂に併設された建築であり、千人もの僧に食事を供するために不可欠な施設でした。秀吉・秀頼の千僧供養会をほぼ毎月、10年近く支え続けた建築、それが国宝妙法院庫裏なのです。

（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 理事長 高橋康夫）

参考文献：高橋康夫『海の「京都」——日本琉球都市史研究』（京都市学術出版会、2015）